

《短 信》

日本人のリテラシー

—明治14年の「識字調」から—

徳 川 宗 賢

（日本人の日本語読み書き能力（リテラシー）は99%以上、などといわれることがある。

しかしこれは非・完全文盲率を示す数字というべく、『日本人の読み書き能力』（二九四八年調査、五二年刊）をみても、日本人の99%以上が理想的な読み書き能力を持っているとは、とうてい考えられない。『国語学大辞典』88ページには「この四八年の調査によれば）社会生活に必要な読み書き能力 literacy を持っている」と認められた者は、もし満点をとった者がそれであるとするとするならば4.4%、不注意による誤りを補正しても、6.3%であるという（野元菊雄執筆）とある。

にもかかわらず、いろいろな事情があるのであろう、日本人の読み書き能力は、一般には依然としてこの文章の冒頭のように考えるのが普通であり、その調査研究は、日本語研究、国語教育、国語問題の各分野を通じて、ほとんど見られないようである。

インデアナ大学のリチャード・ルービンジャー教授によると、日本人は、教育（史）学者、社会学者、言語学者を通じて、ほとんどこの問題に関心を示さないという。同教授は、比較教育史学者の立場から、鋭意日本人の読み書き能力について（特に19世紀のそれを）研究しておられる。そして、次のような資料（「識字調」のあることを

教えて下さった。同教授の御好意によって以下それを紹介するが、同教授によれば、ひとくちに読み書き能力（リテラシー）といってもさまざまある（日本人の読み書き能力）の調査以外のとらえ方もある、ということであろう。また、個人の言語に対する態度、性別、年齢、生育地などによって差のあることは、世界の通例であるという。まさに、社会言語学的话题であると考えて、興味を覚え、投稿することとした。

19世紀から20世紀初頭にかけての日本人の読み書き能力を知る資料としては、まず陸軍省の行った壮丁教育調査がある（地域差のはなはだしいことがわかる）。そのほかに、以下に紹介する長野県北安曇郡常盤村（現大町市）で行われた「識字調」があるというわけである。

『長野県近代史研究』5（一九七四年六月）に載っている小林恵胤「明治14年の識字調」によると、五十川殖という方と小林氏が、郡誌編纂のための資料調査を行っているとき、たまたま発見されたものという。

調査は、明治14年（一八八一年）に行われた。何のために、どういう契機から調査が実施されたかは、いま審らかでないとのことである。ただし郡役所から督促のあつた証拠が残っているから、村独自の企画でないことは、確かである。

当時、全村の男子は一二四名。うち満十五歳以上の男子全員八八二名について、調査が行われた。「識字調」では、調査結果を8段階に分類している。そしてそれぞれのレベルに属する調査対象八八二名のすべてについて、姓名年齢を明記している。したがって、現在ならまだ、各種の詳しい分析も可能である。以下にその全体の概略を、小林氏の論文から引用する。8段階の内容は、次の通り。

年 レベル	15~	20~	30~	40~	50~	60~	70~	80~	計	割合
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	24	43	78	48	67	38	18	4	312	35
3	48	68	78	62	46	22	9	0	363	41
4	20	25	37	18	17	8	3	0	128	15
5	3	9	9	9	2	4	3	0	39	4
6	2	5	2	3	4	1	0	0	17	2
7	0	2	0	0	3	1	2	0	8	1
8	3	6	2	3	1	0	0	0	15	2
合計	100	188	198	143	140	74	35	4	882	100

- 1 白痴ノ者（無之）
- 2 数字及自名自村名ヲ読且記シ得ザル者
- 3 較自名自村名ヲ記シ得ル者
- 4 較日常出納ノ帳簿ヲ記シ得ル者
- 5 普通ノ書簡並ニ証書類ヲ自書シ得ル者
- 6 普通ノ公用文ニ差支ナキ者
- 7 公布達ヲ読得ル者
- 8 公布達及新聞論説ヲ解読シ得ル者

表1 人数(人)

表1と表2
を見て、印象
はどんなもの
であつたろう
か。発見者の
ひとり五十川
氏は常盤地区
の出身。資料
の保存されて
いる市の常盤
出張所の人た
ちと、自分の
祖父たちはど
うだつたであ
らうと、資料
を繰りながら
感慨を深くさ

小学校の設立は、明治7年。
3と4のレベルでは、2のレベルとは逆に、年齢が高いほど、その年齢層内での比率が低くなつていことがわかる。そして、ここ
までで全体の91%（八〇三人）を占めているのである。
5以上のレベルとなると、もはや年齢層とはほとんど関係がない。
最高の8のレベルの実態をみると、村の豪農でかつて戸長などを
とめた経歴をもつものが大部分を占め、ほかに学校の教員、もとの
手習師匠、医者、神官などが含まれていとのことである。
この珍しい資料によつて、100年前の日本人の読み書き能力の実態
の一端が明らかになつたほかに資料はないか。そして、あらためて
現代の実態が知りたくなるのは、私ばかりではあるまい。過去の資

年 レベル	15~	20~	30~	40~	50~	60~	70~	80~	全体
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	24	23	35	34	48	51	51	100	35
3	48	52	39	43	33	30	25	0	41
4	20	13	19	13	12	11	9	0	15
5	3	5	5	6	1	6	9	0	4
6	2	3	1	2	3	1	0	0	2
7	0	1	0	0	2	1	6	0	1
8	3	3	1	2	1	0	0	0	2
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100

表2 各年齢層内で各レベルの占める割合(%)

れ、隔世の感
にひたられた
という。
まず、2の
レベルの多い
ことに驚かさ
れる。そして、
このレベル
は、年齢が高
いほど、その
年齢層内での
比率が高いこ
とがわかる
(常盤村におけ

料の採索を行うのと同時に（そちらはルービンジャー教授にまかせるとして）、現状は、困難をのりこえて、われわれ日本人が調べてしかるべきではないかと思つた次第である（共感してくれる人はいないか）。

リテラシーとは何か、どんな方法によつてそれを明らかにすることができか、まず多角的に考究されるべきであろう。

ヨーロッパで読み書き能力が向上した裏には、宗教改革が想定されるという（バイブルが読めるように）。一方、読み書き能力と産業革命とは、直接の関連がないという（若者は工場）。では日本人の読み書き能力は、何と連動しているのであろうか。地球的視野からして、まことに面白い話題ではなからうか。なお、小林氏の論文の閲読については、信州大学の馬瀬良雄教授のお世話になつた。記して感謝の意を表す。

——大阪大学教授——

（平成元年六月七日 受理）